

第18回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第18回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇二三年度第18回「文芸思潮」エッセイ賞は、一七三篇という、昨年とほぼ同じ数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。今回はレベルが高い作品が集まり、優秀賞レベルの作品がめじろ押しで、たいへん充実したコンテストとなりました。十代後半から九十代までの広い年齢層と同時に、地域的にもアジア、ヨーロッパなど広い地域から寄せられ、それぞれの貴重な体験や、鋭い社会批評なども含まれ、豊かな内容となりました。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、選出された最終作品を対象に、水木亮、都築隆広、五十嵐勉三人の選考委員によって（三神弘選考委員は病欠）八月十三日山梨県甲府市において最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今号には最優秀賞・優秀賞作品を発表させていただきます。以後奨励賞も誌上に掲載させていただきます。明年もまた同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って皆様のエッセイを御応募ください。お待ちしております。

最優秀賞

「文芸思潮」エッセイ賞

「病同・秒同」

西川かつみ（京都府南丹市）

「故郷に私はいない」

坂本 崇（Italy Cuneo）

優秀賞

「Gちゃんの小指」

渡辺 勝（長野県上田市）

「北緯5度の島の原爆人形劇」

高田ひとみ（北海道札幌市）

「わたしが統一教会に通っていた頃」

山田まさ子（大阪府堺市）

「カダフィーの国のヌエジ」

竹中水前（東京都葛飾区）

「女ともだち——同志」

宮尾美明（愛知県愛西市）

「たたむ」

中村郁恵（北海道札幌市）

「闘病に感謝」

金子亜実（東京都中野区）

「春風を纏った服」

菱川町子（愛知県稲沢市）

「眼、あるいは光について」

川寄雄司（東京都荒川区）

「海風に吹かれながら」

春木美子（静岡県三島市）

奨励賞

「海を眺めていた」 室伏三鶴（静岡県御殿場市）

「絶望から希望へ」 小倉一純（神奈川県川崎市）

「母の通信教育」 田中 修（茨城県笠間市）

「ポンデギな夜」 今井清賀（大阪府和泉市）

「エミリーの慧眼」 阪田光孝（大阪府藤井寺市）

「上野公園のホームレス」 西島雅博（福島県いわき市）

「無尽燈」 宮西和代（京都府京都市）

「骨を拾う」 本澤 章（京都府京都市）

選評



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTT プリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

ハイレベルの豊饒

五十嵐勉

第一八回の文芸思潮エッセイ賞は、応募数が昨年とほぼ同じで少なく、内容も数に比例して落ちていたのではないかと危惧されたが、蓋を開けてみると、杞憂に過ぎなかった。むしろ例年よりも優秀賞レベルに良い作品が集中し、どれを落とすか、どれに泣いてもらうか、苦心し悩む事態となった。通例、最終選考は5点法で採点される。5点は最優秀賞、4点台は優秀賞、3点台は奨励賞、2点台は佳作、1点台は入選、それ以下は選外となる。集計して選考委員

の合計の高い順から並べていくのだが、評価がバラバラになる作品も多く、必ずしもこの上からの順で決まるわけではない。しかしとにかく今回トップは西川かつみ氏の「病同・秒同」で合計点が13・2だった。これは三人の選考委員（今年は三神弘選考委員が病気のため欠席）の平均が4・4ということになる。また最優秀賞の候補は選考委員の誰かが5点をつけた作品も有力になる。この方法で上から選考していくのだが、平均4点以上、つまり合計12点は、普通に考えれば優秀賞となり、いつもなら、11点以上も十分優秀賞の圏内にあるのだが、今回12点以上は一一作、11点以上は、さらに一二作あった。つまり優秀賞の圏内にある作品は計二三作あり、極めて高いレベルに作品が集まっていたことになる。ちなみに奨励賞の合計は9点以上が有力候補であり、その9点以上を獲得した作品は、なんと三五作あった。合わせると、五七作品が9点以上、奨励賞以上のレベルに達していたことになる。これは驚くべき数字であり、応募数が一七三に対して33%が奨励賞レベル以上というハイレベルであることを示している。選考委員にとつては嬉しい悲鳴であるが、どうしても簡い落とさなければならぬ事情があり、例年なら受賞していたレベルの作品が今年は涙を飲んでもらう結果となった。

エッセイ賞の選考では、まずトップ——最優秀賞作品から決める。ずばり当選はどれかだが、私はあまりに多い優

「小さな握りこぶし」はるひ（福岡県福岡市）
「ヒトリ生きるカナシ」森崎律子（大阪府大阪市）
「トンネルの向こう」ふとうちえこ（徳島県徳島市）
「元新卒の逃走」丹波蔵堂（埼玉県川口市）
「似非川柳も二〇〇〇柳」佐高源（山梨県中巨摩郡）
「母と娘と、そして私」武中彩（福岡県北九州市）
「二足の草鞋を履く二刀流——医学編——」

林 眞弘（石川県金沢市）

「孤高——亡き師を偲ぶ——」村松佐保（群馬県吾妻郡）

「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」山野冬花（福岡県久留米市）

「ジャンケンで」熊谷和代（徳島県徳島市）

「父の行方」高澤弘至（長野県飯山市）

「今、このときをありがとう」紫陽花（東京都足立区）

「薫ちゃんに捧ぐ」植田郁子（京都府京都市）

「私のものがたり」相澤真理子（神奈川県横浜市）

「机の中の弁当」青地久恵（北海道釧路市）

「暗然たる世界に差し込む一筋の光」

木下ゆかり（東京都世田谷区）



1700 円

御注文はアジア文化社まで



1000 円

御注文はアジア文化社まで

秀作品の中から特にインパクトの強かった作品を三つ挙げた。これまでに三作受賞はなかったが、「病同・秒同」と、「故郷に私はいない」と、「Gちゃんの小指」の三作を最優秀賞にしてもいいのではないかと提案した。しかし他の選考委員に受け入れられず、結局二作に落ち着いた。

「病同・秒同」は末期癌の療養生活を過ごす筆者のそばにいる猫や、出入りする農作業者の励ましを得たりする日常を書いているが、励ましてくれた農作業者のほうが痛になり、先に逝く。残されたその言葉が、鮮やかな光を残していく。「苦しい時も、学問はできるかぎりすること。習気（しき）といって、身についた知識はこの世だけでなく、来世でも自分を助けてくれるから」それに対して筆者は「日々、死ぬことの恐怖を抑えきれないでいた私に、自分の心身の声を毎日丁寧聞き、そして人は遅かれ早かれ死ぬのだから死ぬということに甘えてはいけないことを、教えてくださった」と記す。こうした死と生の境界を斬新にめくり上げて踏み込み、新たな見方を呈示するその言葉には、日常を逆から見る強烈な光がある。さらに鮮烈なのは、その新しい見方による造語である。「病同」「僕の造語でね。病を得て少しは謙虚で深い人間になったような気がするよ。それにどんな状況でも人の根源的価値は変わらないと心から願う。身体を損なった分、見えないけれど心に蓄えられたものが増えたような気がする」「長生きだろうと、少々

優秀賞の渡辺勝氏「Gちゃんの小指」は、最近少しずつ減っている戦争中への回顧が一つの軸になっている。中国戦線での徴発に紛れて娘を強姦する戦争の現実の説得力があり、迫ってくるが、前半部と辻褄が合わない不整合があり、少し直してもらった必要があったのと、そこに示された冷酷さは戦争の真実であるには違いないが、平和に繋がるものとしての+アルファが欲しいのとで、惜しくも最優秀賞を逸した。しかし現在、忘れ去られつつある戦争の現実を少しでも振り返る契機となる意義は大きいので、この方向に、筆者の今後を期待したい。

高田ひとみ氏の「北緯5度の島の原爆人形劇」は、スリランカでの海外青年協力隊の活動を描いて躍動感がある。原爆人形劇を海外で行なうことの困難を乗り越えて、スリランカの人々との交流を深めつつ、意味ある活動が続けた一つの達成は、爽やかな読後感を残す。また「戦争と日本人がどう関わってきたかを考えるようになった」という、むしろ日本人の側の戦争への反省の希薄さに到達する部分は、鋭く突き抜けている。ただ、それを受けての全体の結論に、海外での「貴重な体験」を回顧するに留まっている真の問題提起の希薄さが覗いていて、主張の強さに欠けること、またタイトルについて「北緯5度」では曖昧で、どうして「スリランカ」とはっきり言わないのか不満だった。常連となった山田まさ子氏の「わたしが統一教会に通っ

早くこの世を去ろうと、今この瞬間を生きているということに違いはないから、同じだね」「秒同だな。ははは」「こうした来世へと貫かれた言葉は新鮮である。この言葉によって命が新しいものへ開かれていく。その感覚が、痛になった人だけでなく、だれをも普遍的に救っていく点に大きな意義があると思った。

もう一つの最優秀賞の坂本崇氏「故郷に私はいない」は、まず文章がいい。おそらく文章は全応募者中最も緊密な凝集力を持っている。「鏡に写っていたのは知らない人間だった」という出だしもよく、説得力のある流れが快く進んでいく。父親が日本人で、母親がキプロス人という血筋を持つ筆者は、外貌によって安易に判断する心ない人々の言葉に苦悩する。日本人として育ち、日本語も母語としてきれいに話す日本人としての内質が、外貌によって傷つけられることに苦しむ。「私が日本に戻ってこないのは、おそらく外国でしか私は日本人になることができないからだと思う」という吐露には、痛切な響きがあり、ここに長く単一民族として国家を成し、閉鎖的であった日本の内向社会性への痛烈な批判がある。否応なく国際化の波に晒され、異人種と混じらざるを得ない現実の状況に対して、あまりに対応が遅れ、歪みや悲劇を生んでいる現代日本の一面への、身を挺した告発がここにある。自らに即した強烈な糾弾を感じた作品だった。

ていた頃」は、最近安倍首相の暗殺事件からクローズアップされた統一教会の問題を体験から描いていて、話題性は光っていた。この特殊な宗教の世界を、かなり内側の信者の立場から回顧する筆致は、確かに興味をそそる。特に、どういう人たちが信者になり、引き寄せられていくのかがよくわかる。心優しく、弱い、貧しい人たちの素顔が見えてくる。まさに「毫（こ）り取られる」者の姿が浮かび上がってくる。しかしそれをさえ癒しあう何かがある。「私にとつては、不毛でも無意味でもなかった。友達が差し出してくれた温もりだった」と記すそこに、この宗教問題の底層が覗いている。追及がここに留まっているところに限界があり、このあとをもっと掘削してほしい不足感が残ったものの、一つの本質を突いている点は、評価できた。

竹中水前氏は、タイヤ会社での海外営業に豊かな経験があり、今回はそれを十全に生かして、リビアの興味深い実情を著してきた。カダフィーの時代の政治状況を、タイヤの現地営業を通して鮮やかに浮かび上がらせている。日本企業の海外発展が、高度経済成長の原動力になり、その前線での営業の冒険を伴った苦勞を描きつつ、同時にその国その土地の異なった世界をリアルに浮かび上がらせている。このおもしろさは、国内では得られない勇躍感があり、新聞社の特派員ものよりも密着感を持って迫ってくる。こういう領域の記録をもっと大事にして、海外から日本を見

直す眼を養いたいのだと思わずにはいられなかった。「たたむ」という中村郁恵氏の作品は、終生親しさから遠かった姉の存在を通して、人手に渡って処分されていく両親の家の最期を看取っている。家の解体と同時に家族の解体も覚えながら、その哀惜を綴る筆は、「家」の構造そのものへの本質的問いかけを投げつつ深められる。緻密な文章はその哀惜に彩られて、美しいまでの旋律を奏でている。ただ、この最後の場面に「ボレロ」がふさわしいかどうかは、やや疑問が残った。

今回も常連グループの活躍は、上の作品群の層を特に厚くしていたが、宮尾美明氏の「女ともだち——同志」も晩年の女性ともだちの大きな変化を書き表して、人生の模様の複雑さ・深淵さを感じさせるエッセイとなっている。大学時代の澁刺とした夢と勢いが、何十年という歳月の果てにどのように変わったか、その浮沈の軌跡の中に、むしろ深い人生の味わいがある。宮尾氏は健在で、むしろ筆はいつそう冴えていることを感じさせた。

「春風を纏った服」の菱川町子氏のエッセイは、題材は日常の身近にあるものの、ピアノを無理して習わせてくれた母親への深い追懐のうちに、残してくれた和服を新しい現代の衣装に作り直して着る、過去と現在を繋ぐ感情に細やかな味があり、魅力を醸していた。過去の愛情を作り替えて着るその繋ぐ行為の中に、愛情の糸が結ばれる。それが

現在を生き生きと動かし、また新たな力へと繋がっていくことが、その文章の背後に感じられて、読後感を快くしている。

金子亜実氏の「闘病に感謝」は、自堕落な母親はさらに鬱病にかかり、母親に苦しめられる人生を負ううちに、自分も精神的な病に陥る負の連鎖を描きながら、それを逆転の発想によって乗り越えていくストーリーは感動的だった。親友の母親の「あなたが本気でお母さんの幸せを思えるようになったとき、お母さんの病気は治るわよ」という言葉を契機に、母親を立ち直らせ、また過労で自身も危うくなったとき、逆に母親に助けてもらうやりとりは人間が心で交わる深い大きな可能性を具現化して、眩しいものがある。やや稚拙な点も残るが、更生の深い体験の記録には、深く響いてくるものがある。

奨励賞の上位には、優秀賞に劣らないレベルの高い作品が並んでいる。「海を眺めていた」(室伏三鶴)は、路上ライブをしていたとき、熱心に聴いてくれた女性と仲良くなったものの、父からの虐待、集団レイプ、援助交際、自殺未遂、PTSD(精神疾患)という過酷な過去を持つその女性の闇を共有することになる。最後、訣別したときの房総半島の海を追懐するこの作品は、確かに深い胸の痛みを刻印していた。

社会批評の色彩の強い「エミリーの慧眼」当たり前とは

何だろう」(阪田光孝)も痛烈な現代への批判を蔵していた。「ソーシャルメディアに群がる人々の『こころ』」は

虚栄心でいっぱいよ」と言い、現代人の「こころ」の荒廃を暴いて、「自らの行為で、自己の価値を上げようとせず、他人を貶めることで、自己の価値を上げようとする」という指弾は鋭い。

「骨を拾う」(本澤章)の横書きの作品には難があったが、内容はよく、焼かれた父親の骨と、生きていた頃の父親の指先の動きが重なるラストは鮮やかだった。

「無尽燈」は京都の近所付き合いの中に見る人間の親しい温もりがよく描けている。「人はこんな他愛もない楽しみを共有し、繋がりを確かめ合い、生きるエネルギーにするのかもしれない」という言葉は、殺伐とした現代に一石を投じている。

韓国での学生の交流で蚕の蛹の缶詰を食べさせられる「ボンデギの夜」(今井清賀)は、食物による親しさの体験によって深くなる真の交流の一面がおもしろくよく描かれていた。

「小さな握りこぶし」(はるひ)は、ウクライナの報道で見た幼子の握りこぶしから想いが連なって、太平洋戦争、原爆と、戦争の惨禍を全体に振り返って、平和への希求に大きく繋げていることに真情がこもっていて、説得力があった。

同じ反戦への思いは「ジャンケンで」(熊谷和代)も痛切で、戦争体験者の肉声は強烈なものがある。

「似非川柳も二〇〇〇柳」(佐高源)は母の遺品の中に残っていた川柳を繕ってその心にあらためて触れる深い交わりが温かく残る。

若い世代の作品「元新卒の逃走」(丹波藏堂)は最初に就職した会社の仕事が劣悪でノイローゼになり、そこから再生するあらずじだが、新卒者が陥る罠を丹念に描いて、しかもそこから立ち直る過程は、たくさんさんの若者に共通するものを含んでいて示唆に飛んでいる。

「トンネルの向こう」(ふとうちえこ)は、夫の鉄工所が倒産してから、悪戦苦闘に明け暮れ、やっと光を見る過程が描かれており、切実な軌跡が留められている。「いつか腹から笑える日が来る」「働くことは今を生き、明日声を出して笑うためであった」という吐露には、迫真力がある。「絶望から希望へ」(小倉一純)は精神病院の入院体験をよく記し留めて、そこからの回復と未来へかける希望を思いを込めて表現している。

「母の通信教育」(田中修)は、かなり歳を取ってから、通信教育で調理師資格を取り、定年まで病院に勤める母親の長い苦闘を実直に描いている。父親の過去も挿入され、両親の世代が鮮やかに浮かんでくるエッセイとなった。

「私のものがたり」(相澤真理子)は不遇な女性の孤独を

叙述しているが、鮮烈な言葉に魅かれた。「生きるための燃料になる思い出があるのとないのとは、年とってから人生の質が違ってくる」この一文だけでも奨励賞に値する。

「上野駅のホームレス」(西島雅博)はタイトルのごとく貴重な体験を題材にして興味深い。上野のこの世界を直接取り上げた作品は稀有で、それだけで価値がある。筆者の半生の輪郭をなぞりながら、このような岐路もあったことが同時に窺えるが、一過性の雰囲気があつて、上野を通り過ぎていくだけに終わっているのが惜しまれる。

「暗然たる世界に差し込む一筋の光」(木下ゆかり)はバレエを通してウクライナの戦禍に言及する。弱冠一七歳の筆者の文章はしっかりしていて、バレエの領域から、平和を希求する真摯な声は、広く響き渡っていくものがある。文章もさらに持続して鍛錬していったほしい。

「ヒトリ生きるカナシ」(森崎律子)は一人暮らしで最後に自殺する女性の内面に迫って、痛切なものがあつた。

「母と娘、そして私」(武中彩)は母子の思いの齟齬を露わに描いて迫ってくるが、もう一つ結晶度に足りないものがあるのが惜しい。もう一度推敲してほしい。

「孤高」(村松佐保)は、学者の孤獨な一生に付き添う姿が温かく、それによって学問に生きる者の孤高の姿がいっそう鮮やかになっている。清らかな印象が残る。

奨励賞に漏れたが、印象に残る作品を挙げておきたい。「読書できない!」(水越晴子)、「夜道」(青海光)、「レーゾンデートルと使命」(小室澄江)、「日々是好日」(吉田宏子)、「戦争を語る父の目に涙が」(倉沢辰子)、「ささやかな人生」(秋葉岩男)、「人生の同志」(風早爽)、「小児科医の願い」(秋谷進)、「意外なメッセージ」(近藤幹夫)、「桃太郎がつかないだ字びのバトン」(雲海倫)、「絵描きの青春」(千代田さん)、「毛がに」(姉蘭浩一)、「吉右衛門の思い出」(寅次郎)、「背中の中の格闘」(山家衛良)応募総数はやや少ない感があるものの、内容は極めて充実していてハイレベルだった今回。これからもこのエッセイ賞に、同じように赤裸々な体験、真摯な文章が多く寄せられることを期待したい。多くの人と共有していくべき価値ある文章、記録、主張を待っている。



「文芸思潮」編集部員募集

有給 大卒以上／要編集経験・文章力
履歴書送付 編集部まで

佳作

「里山便り」	鶴賀イチ
「意外なメッセージ」	近藤幹夫
「人生に楽なし、でも楽しみ有り在り」	山田恵津子
「最後の日々」の夫の言の葉、そして私は」	田浦チサ子
「雑感、または思い出す事」	鈴木信一
「輪っかぽっぽ」	高尾周一
「読書できない!」	水越晴子
「喪失したもの」	西尾 吉
「戦争を語る父の目に涙が」	ふきのとう
「夜道」	青海光
「愛のカタチ」	九条之子
「令和は身軽であれ」	三日月季衣
「レーゾンデートルと使命」	小室澄江
「過去と現在を行き来する」	佐藤悦弘
「小児科医の願い」	秋谷 進
「コスミック・キャンデーズ」	小林宏子
「家族について」	よまひこ
「絵描きの青春」	千代田さん
「ささやかな人生」	秋庭岩男
「被災地での約束」	桜さく
「十度目の夏」	香山マリエ

「人生の同志」	風早 爽
「背中の中の格闘」	山家衛良
「誰のマジック」	田中美晴
「最後の面会」	福田哲也
「私たちの春」	高島 緑
「毛がに」	姉蘭浩一
「手」	山田菜里
「吉右衛門の思い出」	寅次郎
「タラップに導かれて」	金田一淳
「山の師匠」	馬場岩ひろし
「叔母を悼む」	澤井樹生
「母と娘」	丸山 史
「日々是好日」	吉田宏子
「別れの悲しみ」	森田麗実
「『桃太郎』がつかないだ字びのバトン」	雲海倫
「すて塩」	家森澄子
「弁当終了」	斉藤はな絵
「いいよ」	武藤蓑子
「祖父から最後に聞いた言葉」	山口和花菜

※受賞を辞退された方がおり、修正いたしました。



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
戯曲も多数ある

終末を心豊かに生きる 高齢者の願い

水木 亮

今年の応募作品の全体の感想は、特に高齢者が自分の人生を振り返り、どうしても書いておきたいことを投稿してきた作品に心ひかれた。厳しい現実の中で希望を失うことなく、人生の最後を少しでも心安らぐ終末にしようと頑張る姿が、自分にもひしひしと伝わる作品が多かった。これこそ高齢者と歩むこのコンクールの願うところでもあり、高齢社会を生きる上で少しでも元気をもらえるなら素晴らしいことだと思う。

以下心に残った作品について感想を述べたい。

「病同・秒同」

西川かつみ

最優秀に選ばれたこの作品は、ローソクが消える前に明

るく照らす。そんな終末を感じさせる光るエッセイで、「先生」の言葉がこころにしみる。また猫との交流も温かい。

「わたしが続一教会に通っていた頃」 山田まさ子

優秀賞に選ばれたこの作品は、統一教会で知り合いになった女性について書いている。時事的に話題性もあるが、そこに居場所を見つけないならなかった女性、そういう人もいるのだと知り、胸を打たれる。

「海風に吹かれながら」

春木美子

優秀賞のこの作品は、透析の現場で看護婦として働きながら、自分にガンがみつかり病院を辞めようとしたとき、一緒に働いていたガンの病歴があるMさんに希望を持つことだと励まされ、退院後再び職場で働くこととしたとき、Mさんの姿が消えていたエピソードである。Mさんの励ましの言葉がよい。

「闘病に感謝」

金子亜実

波乱万丈の家族環境で母が病み、その看病をした自分もまた病むことになった。それを克服し闘病から得られたものに感謝して生きる。それは同じ心を病む人たちの力になると思う。

「春を纏った服」

菱川町子

「リメイクした服には心がある」とあるように、苦労した母親への恩返しのリメイクに筆者の心が伝わる、素敵なおエッセイだと思う。

「女友達——同志」

宮尾美明

青春時代を共に生きた仲間のそれぞれの人生を回想した。老いも病も新しい友達として生きる。老いの日々を生きる人々が共感するエッセイである。

「机の中の弁当」

青地久恵

次に奨励賞で私が印象深いのは、次の作品である。
お礼の小包が届いたことから、中学生の頃、弁当におかずがない男の子に交代でおかずを作ったことが思い出された。間もなくその男性は亡くなり、彼の牧場を訪れる。そこで彼がどんな厳しい暮らしをしていたかを知る。老いての恩を忘れない男性の思いが悲しい。作者にとっても忘れられない経験であったろう。

「ヒトリ生きるカナシ」

森崎律子

病んだ友人の自殺を書いた。その友人に寄り添う女性の温かい心が伝わる。厳しいなかの救いでもある。こういう最期を生きる人もいる。その壮絶な姿に学ぶものがある。

「小さな握りこぶし」

はるひ

天候の加減で北九州ではなくて、長崎に原爆が落ちたという記述に驚いた。父親と別れなければならぬ、ウクライナの子どもの小さな拳から、あらためて平和の尊さを感じる。「薫ちゃんに捧ぐ」

植田郁子

導人がうまい。誰の人生にも忘れられない悔いがある。

学んでその悔いを超える時、人間の魅力が生まれると思う。また薫さんへの供養にもなるだろう。

「母と娘と、そして私」

武中 彩

高校生の頃、母親に暴言を吐いた。母は亡くなり、歳月を経て叔母からいかに母親が自分のことを思っていたかを教えられる。その叔母に母への孝行の代わりをした。最後のまとめがよく書かれている。

「上野公園のホームレス」

西島雅博

若き日の公園でのホームレス生活を振り返った。両親の息子に対する思いが、絶えず筆者の心の底に生きていて、障壁を超え筆者の希望する人生を励まし続けたと感じた。

以下心に残るエッセイについて触れたい。

「日々是好日」

吉田宏子

老いて壊れてゆく夫の様子を書いた。誰にも訪れる終末。老いを生きる上で誰もの参考になるエッセイだと思う。

「愛のカタチ」

九条之子

いろいろな「愛のカタチ」を書いた。ラストの葬儀のエピソードに筆力を感じる。

「人生の同志」

風早 爽

人生はままならない。老いて再婚した妻が病む過程を書いた。今度は妻に寄り添うことに尽きると思う。

「被災地での約束」

桜 さく

入選

- | | | | |
|----------------|---------|----------------------|---------|
| 「褐色の世界 ベルベル人」 | 松原泰子 | 「古代・洛東江の畔」 | 崔宣葉 |
| 「迂回して、秋」 | そろかどましろ | 「ねじれの位置からいろいろ想像してみた」 | ふじもとなおこ |
| 「訛りと方言、丸出しで」 | 三木亮介 | 「レムとノンレムからの解放」 | 柴田節子 |
| 「風の盆」 | 比留間 進 | 「『軍国少年』の遺言」 | ゴルビー長田 |
| 「褒め上手」 | 有澤かおり | 「夢電話」 | 山田じゅんた |
| 「『時代おくれ』に目覚める」 | 平野靖雄 | 「おい、元氣かい」 | 伊手人首麻呂 |
| 「不婚」 | 長坂弥生 | 「マンゴーの実のなる村で」 | 中西淳子 |
| 「いのちの燈火」 | 岡 大吉 | 「キーキ一切れの悲しみ」 | 藤野璃子 |
| 「障害がもたらす家族の絆」 | 津森悠平 | 「双眼鏡」 | 吉原あやこ |
| 「住まば都 住めば都」 | いっちゃん | 「鎌打ち神事から始まる」 | 明石弘貴 |
| 「芸術の世界」 | 秋葉みのり | 「手紙」 | 谷垣宣長 |
| 「父と競馬」 | 佐田真紀 | 「イヤホンが便所に流れた時の話」 | 白田イルマ |
| 「十八歳一ヶ月の苦悩」 | 次女 | 「墓をさがす」 | 高木敏克 |
| | Samon | 「愛生傳命」 | ゆきまろい |

被災地の人々を励ますために訪れた筆者の、貴重な不思議な体験をかいた。被災地に寄せる思いがあつたからこそ、経験できたことであろう。死者の魂を感じる。

「ジャンケンで」 熊谷和代

戦後七八年を経た日本。戦争を学ばない国民は操作する政治家の言いなりになる。戦争体験者がこうして、戦争を語るのは老いを生きる上でとても大事なことだと思う。

昨年も書いたが、人間一度きりの人生を悔いなく終える



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文芸界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

暗くて深い井戸の底……

都築隆広

毎年、「最も良かったエッセイ」と「最も印象に残ったエッセイ」が異なる。

私が「最も良かった」と思う作品は、そもそも最優秀賞に選ばれにくい気もするが、「最も印象に残ったエッセイ」は大体、活字にできるだけの公共性に乏しく、選考会以前に落選してしまう。そういった作品に触れることができるのも、下読み委員を兼任することの醍醐味というか、役得といえよう。ところが、今年はそのどちらもが上位に入賞している。珍しい結果だ。

最優秀賞の「病同・秒同」と「故郷に私はいない」は共に高評価を付けたものの、「最も良かった」かと尋ねられ

ために、自分の一生で忘れられない思い出を記録することは、その人の人生の終活でもある。記録しておけば誰かが読む。「文芸思潮」がシニアの意見に重点をおいているのは、いまだ日本で珍しい文芸雑誌である。今回も貴重な経験を書かれた高齢者の作品が多かった。来年もいろいろな作品を読みたい。



たら疑問が残る。「病同・秒同」は限られた日々を生きる人々の軽みや明るさがあって、好感が持てた。ただ、文芸誌の掲載作にいかにもありそうな人間関係で、少々、地味にも感じられた。「故郷に私はいない」は、ある身体的特徴から、この人ならではの苦悩に苛まれる話。個人のコンプレックスが、社会性のある問題提起へと昇華されてゆく点が、エッセイとしてバランスが良い。

優秀賞「北緯5度の島の原爆人形」は最近、国家破産したといわれるスリランカでボランティアで原爆人形劇を公演して回るという内容。海外で出会った人々のことが帰国後に心配になるというのはよくある話で、国家破産した国の人々ともなればそれはひとしおだろう。最優秀賞にふさわしいと断じたものの、選考会では「ドラマ度が低い」と、ものいいが付き、弁護しきれなかった。

同じく優秀賞「眼、あるいは光について」。ボヤ騒ぎを起こして家を出て、友人達とルームシェアをする青年の、益体もない日々が詩的な文章で綴られる。作者は言語聴覚士なる職に就いているようで、言語感覚に優れ、並々ならぬ文体へのこだわりを感じる。私はこの作品が最も良かった。とはいえ、万人に受け入れられるとはいいい難く、上位入賞できてめでたし、といったところか。

では「最も印象に残ったエッセイ」は何か。これまた優秀賞「Gちゃんの小指」。いつも牡丹鍋を振る舞ってくれ

第19回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格）。

応募規定●4000字以内極力パソコン印字で（原稿用紙手書きの場合は必ずA4原稿用紙を）

※応募原稿は返却しないので、コピーを取り、コピーの方を送付すること。

パソコン・ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（2024第19回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④ふりがな（どちらにもふりがなを）⑤年齢・生年月日・性別⑥住所〒（必ず郵便番号を明記のこと。ないものは失格）⑦電話番号⑧職業・略歴※①～⑧でこれらが厳守されていないものは失格となる。

応募審査料●1800円を郵便為替（郵便局で購入）で同封のこと（為替には無記入・無押印）。

外国からは14USドルを同封。切手も可。郵便為替1000円+切手800円可（外国切手不可）

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2024年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2024年6月25日発売の「文芸思潮」92号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作および優秀作は2024年9月25日発売の「文芸思潮」93号に発表掲載。奨励賞も順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、あなたの真の声を乗せたエッセイ作品をお寄せください。



る優しい祖父。成長した孫に、祖父は普段の姿からはかけ離れた、おどましき戦争譚を語る。この手のエッセイは反戦の意図のうえに書かれ、読まれるべきものだ。だが、祖父の打ち明け話はあまりに凄まじく、人間の暗い欲望を刺激させる。溢れ出る嗜虐性は、暗くて深い井戸の底を覗き込むような感覚に読む者を陥らせることだろう。これは本当に反戦エッセイなのか。描きたいのは、戦場に吞まれた人々の醜い欲望の方ではないのか？ その危うさが本作の魅力であり、欠点とも感じられた。

常連投稿者、山田まさ子さんの「わたしは統一教会に通っていた頃」も優秀賞。例年なら支持していた山田さんのエッセイだが、今年は反対の立場をとった。というのも、冒頭に安倍元首相の暗殺現場を見物に行く場面があり、そこに倫理観の欠如が見られたからだ。社会を揺るがす事件で、元首相という肩書も相俟って、人間一人の命が失われている点がばやけているようにも読める。後の統一教会についての部分は選考会では評判が良かったものの、やはり山田さんの本質は私小説風エッセイであり、時事的なテーマが絡んでくると素直に楽しめなかった。

邪悪な姉と、潰すことになる家についての思い出を描いた優秀賞「たたむ」、モラハラ夫と問題だらけの職場に悩む、奨励賞「私のものがたり」。顔見知りの自分を痴漢する「ケロさん」と彼に恋する「薫ちゃん」に挟まれる苦難



の人間模様、奨励賞「薫ちゃんに捧ぐ」、家事をせず、性格も悪くなった夫を描いた、奨励賞「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」。特に「たたむ」「私のものがたり」「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」の三作は同一作者のものではないかと思える程、家庭内の悪意や不快感が巧みに描かれていた。

心の暗部といえば、死を願う人々の胸の内もまた仄暗い。奨励賞「ヒトリ生きるカナシ」は自殺する「七子さん」の手記が生々しく迫ってくる。こう書いてゆくと今年は暗いエッセイばかりのように感じられるかも知れないが、むしろ逆で、全体的に闇の中に希望の光を見出す作品が多かった。

「昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか」というのは、ニーチェの言葉だ。他人の暗部を覗き、書きとめたくなるのは人間心理としてわかるから、ペンをとる発端はそれで良い。ただし、固執し続けると、読者にもストレスを与えてしまう。市井の人々にまで、自分の声を届けたいと願うのなら、暗い井戸からいつかは眼をそらし、光の差す方に、ゆつくりと歩を進めるべきであろう。